《 会 議 録 》	
会議名	令和８年度　第１回認知症施策推進会議
日時	令和８年１０月２日（金）午後２時００分から午後３時３０分
場所	箕面市立総合保健福祉センター（みのおライフプラザ）２階大会議室
出席者	［委　員］古河委員、志水委員、八田委員、辻尾委員、角委員、吉田委員、則包委員、西川委員、布尾委員、岡崎委員、山岡委員、大栗委員、森橋委員、黒地委員、田守委員、白坂委員、中村委員、間委員 ［事務局］中村課長、七樂課長補佐、北野係長、多田保健師、栗本保健師、矢宗精神保健福祉士、三浦保健師、岩田保健師
傍聴者	０名

〔会議内容〕

１．開会挨拶、議題と配付資料の確認について

（１）議題と配付資料の確認を行った。

（２）開会挨拶を行った。

２．案件１．令和７年度認知症初期集中支援チーム活動報告について

（１）事務局から「資料１」に基づき説明

①認知症初期集中支援チームの概要、構成メンバー、支援の流れ、並びに令和７年度における相談件数の状況と介入前後の変化について説明を行った。

（２）質疑応答・意見交換（骨子。以下同）

委員：相談件数が減少している。地域包括支援センターの相談対応力が高まっている、医師との連携が進んでいる、問題解決の手順が周知されてきているのではないかと感じている。症例の傾向としては、医療未受診者が多く、医療にどのようにつなげるかが課題。往診やキーパーソンを探し、うまくつながるケースもある。初期集中支援チームとしてうまくいっている印象。

委員：困難なケースとしては、家族が介入を拒んでいるケースがあげられる。初期集中支援チームは強制力はないため、無理な介入はできない。家族の同意を得ることに難しさを感じる。困難ケース以外は、顔の見える関係ができあがることで解決までの期間が短くなっている印象。

委員：初期集中支援チームとしてうまくいっている。他市に比べ、精神症状が激しい人は少ない印象。本人や家族が介入を拒否しているケースの対応が一番難しいと感じる。

３．案件２．　令和８年度認知症月間に向けた取組について

４．案件３．　令和８年度認知症月間の報告と令和９年度認知症月間の内容について

（１）事務局から「資料１」に基づき説明

①認知症の正しい理解・普及啓発を目的とした「本人の耳に声を傾けようプロジェクト」の開始、

地域での声の収集と発信方法について説明を行った。

②認知症月間の啓発活動内容、令和８年度の「みのおオレンジフェア 2026」の内容および令和９年度の「みのおオレンジフェア 2027」（案）の内容について説明を行った。

（２）質疑応答・意見交換

特になし。

５．案件４．認知症施策の取組状況と第１０期高齢者保険福祉計画・介護保険事業計画に包含する「認知症施策推進計画」（案）について

（１）事務局から「資料１」および「参考資料」に基づき説明

①第１０期高齢者保健福祉計画・介護保険事業計画に含有する「認知症施策推進計画」（案）について、第９期計画からの変更点を中心に説明を行った。

②介護サービス等事業者へのアンケート調査結果、保健福祉および介護保険に関するアンケート調査結果について説明を行った。

（２）質疑応答・意見交換

委員：認知症の早期発見・早期受診の促進は継続して行う必要がある。アンケート結果では変化が見られない部分もあるが、地道に長期的に取り組むことが重要である。

委員：外来では早期発見・早期診断に努めており、新薬の登場により早期対応の重要性が高まっている。MCI の割合は約１０人に１人とされ、多くの患者がいると認識している。関係者が協力して取り組む必要があると感じている。一方で、外来では本人の話を丁寧に聞くよう心がけているが、介護負担の大きい家族の話が優先されることも多く、本人の話をじっくり聞ける場の必要性を実感している。

委員：７月から勤務。それまでは他病院に勤めており、市民講座や認知症サポーター養成講座を通じて地域との関わりを持ってきた。本市での地域活動はまだこれから。認定看護師として地域支援に何ができるか検討していきたい。

委員：認知症カフェの拡大は、地域包括支援センターの支援によるものだと考えられる。認知症カフェ一覧に掲載されていない認知症カフェもあるため、情報を反映してほしい。認知症施策推進員が各地域包括支援センターに兼務で配置される予定とのことで、現状でも多忙であることから、今後も協力して取り組みたい。

事務局：認知症カフェ一覧は、地域包括支援センター主催のカフェのみ掲載している。今後は、認知症カフェに対する登録制度を設け、登録されたカフェを一覧に掲載していく方針である。

委員：早期段階の認知症への対応が重要と理解しているが、予防の視点も重要と感じている。若年で精神的な問題を抱えた子育て世代のかたとの接点から、認知症に近い状態を感じることがある。孤立や社会的つながりの欠如により被害的な捉え方をする人が多い印象。マンパワー不足を理解しつつも、引きこもりがちな人々に対しては人との交流の楽しさを伝え

ることが必要である。また、家族介護者には、プロに任せて介護から解放される時間を持つことの重要性を知ってもらいたい。

事務局：予防の観点も重要であり、みのお認知症ガイドブックにも記載している。今後も予防に関する周知活動を継続していきたい。

委員：民生委員として１８年間活動しており、認知症が非常に増えている印象を持っている。子育てサロンは減少し、高齢者の見守り活動に特化している。ラジオ体操を毎日実施しており、毎日来られる参加者もおり、そういうかたは心配していない。自宅にこもる高齢者が多い印象。小野原地区では外部から引っ越してくる一人暮らしの高齢男性に特に懸念がある。９月は敬老月間に伴い訪問する機会があるため、可能な限り全戸訪問を目指して声掛けをしている。認知症の傾向としては、自宅から一歩踏み出すことが困難なかたが多く、地域住民とのこまめな関わりを持つことが認知症予防及び介護予防として重要であると考え、日々心がけて活動している。

委員：グループホーム見学に訪れた家族からの相談で、老々介護で 80 代半ばの夫が妻を介護しているかたがおり、若い頃は仕事に専念していたため、今は妻の介護を一生懸命取り組みたいと話されていた。こうしたケースの増加が見られる一方で、デイサービス利用者の中には「認知症になったら終わり」という声も聞かれる。全体として認知症への理解が徐々に深まってきていると感じており、地域活動を通じて理解をさらに広めていきたい。本人の声の取組も、グループホーム連絡会を通じて周知していきたい。

委員：参考資料のアンケートを踏まえた感想として、４８ページの認知症に関する考えでは、普段の生活で認知症の人と関わる機会があればよい、困ったときに迷わず手を貸せるとの回答が多いという印象を受けた。認知症のかたへの理解は比較的進んでおり、良好な結果だと感じた。４６ページの相談窓口では、「高齢者くらしサポート」という名称が一般の人にはわかりやすく、言い方に気をつける必要を感じた。また、SOS ネットワークについては、８月に行方不明者が亡くなる事例があった。写真付き情報の提供はケアマネ連絡会には十分に行われておらず、今後協力機関として連携を図っていきたい。

事務局：SOS ネットワークに関しては、協力機関の拡充を検討中であり、正式に決定次第、関係機関へ協力依頼を行っていきたい。

委員：認知症カフェの数が数年前には１０に届かないと聞いていたが、現在は増加しており、その広がりと努力の成果を感じている。訪問看護ステーションとしては、本人や家族の声を拾うことが支援の中で可能であり、訪問看護ステーション協議会を通じて周知していきたい。訪問看護は外出して行う業務であり、認知症カフェへの参加も積極的に行っている。参加していると複数のカフェをはしごするかたもいる一方で、あまり見かけなくなったかたや服装などの変化から心配しているケースもある。SOS ネットワークの協力機関として、できることがあれば協力していきたい。

委員：資料１の４ページにおける初期集中の活動報告では、介入後の介護保険申請者の中に要介護３のかたがおり、これまで支援につながっていなかったかたがいたことに驚いた。９月

から１０月にかけて、地区福祉会と民生委員が敬老事業対象の７５歳以上のかたへ箕面市内で全戸訪問を実施している。訪問時に、昨年と比べて状態の変化があったり心配な様子があれば地域福祉コーディネーターへ報告されることがあり、地域包括支援センターと連携して早期発見に努めている。家族支援としては、びわの会を社会福祉協議会で支援している。井戸端会議を開催し、介護に困っている家族が新たに参加している。ある事例では、料理好きなかたが地域のスーパーで要注意人物としてマークされていると感じ、一人での買い物をやめたことが報告された事例があり、本人の自立を損なわないよう、スーパーや関係事業所への働きかけが必要と感じた。

委員：北部・西南地域には、３か所の認知症カフェがある。「なないろカフェ」は９年間続いている。当初は認知症カフェがほかになく、市民が自発的に運営し、誰かが引き継いでくれればと考えていた。「咲くら」は認知症カフェモデレーターや地域住民、傾聴ボランティアなど市民が主体となって立ち上げたものである。「あったか広場」はマンション住民のつながりを深めるため、マンション管理組合自らが創設した。このような地域での広がりが望ましい。認知症カフェ以外のカフェにも認知症のかたが参加しており、周囲も自然な形でサポートしている。認知症と認識して受け入れられるかたとそうでないかたがいるため、さまざまな形で参加できる場所が必要だと感じている。

委員：家族から「AI ではこんな支援を提案された」との相談がある。今後は多様なツールを使い、知識を持ったかたが相談に訪れることが予測される。様々な世代のかたに認知症のことを理解してほしいと思う。認知症サポーター養成講座等を含めて様々な世代に周知していきたいと思っている。

委員：認知症初期集中支援チームによく相談しており、この場を借りてお礼をいう。アンケート結果から、高齢者くらしサポートの認知度がやや向上していることに安心したが、長年実施しているものの、まだ十分に認知されていないとも感じている。もっと気軽に安心して相談できる場をつくり、周知を強化していきたい。先ほど話のあった介護疲れに対する意見について、介護サービスの利用により介護者のストレスが軽減されることが本人のストレス緩和にもつながると認識しており、高齢者くらしサポートの周知を強化し、介護疲れを一人で抱えるかたを減らしていきたい。

「オレンジカフェ太陽」および「オレンジカフェ「かやの」」の認知症カフェを実施している。「かやの」はみのおキューズモールの協力で無料で場所を提供いただいている。また「ルミナスオレンジカフェ」も UR の協力を得て実施している。今後は企業等への働きかけを進めながら、認知症カフェの拡大を図っていきたい。

委員：認知症のかたに限らず、生きづらさを感じる人がいると認識している。高齢者くらしサポートとして訪問を行い、本人の話を丁寧に聞くことを心がけているが、高齢者くらしサポートだけでは解決が難しい課題もあると感じている。様々なパンフレットが初期相談の際に役立っており、日々どうすれば生きづらさを生きやすさに変えられるか相談しながら対応している。多くのかたに利用しやすいサービスがあることを理解してもらえる仕組み作

りが大切だと感じる。

オレンジカフェについては、豊川北小校区、東小校区で開催している。一方、彩都の丘学園校区では高齢者の割合が低く、高齢者くらしサポートの認知度が低いため、地区福祉会の協力を得て周知に努めた。今後も継続して周知に努めていきたい。

委員：今年４月から勤務しており、他市で地域包括支援センターの勤務経験がある。他市と比較すると、認知症初期集中支援チームの件数や医師の意見、精神症状が強くない段階で関わっている点が異なると感じている。地域で見守りの目があることで早期に支援につながっている印象がある。重症化予防から一次予防まで視点が広がっており、予防的な側面も考慮しながら地域包括支援センターでの活動を進めていきたい。認知症カフェでは「認知症になったら終わり」といった考えを持つかたもいるため、予防的なメッセージが誤解されないよう配慮していきたい。

６．その他

（１）事務局から令和８年度第２回認知症施策推進会議の開催日程について、現時点で未定であり、後日通知する旨を連絡した。

以上